令和５年１月３日（火）　陸奥新報【１面】

アジア輸出へ始動

弘大育成品種リンゴ「きみと」

弘前大学育成品種「きみと」（同大提供）

弘前大学育成品種の黄色系リンゴ「きみと」について、弘前大は東京の商社と協力し、日本と、季節が反対でリンゴ栽培が盛んな南アフリカの両地域で通年栽培することでアジア圏への輸出を目指す取り組みを始めた。南アフリカでの「きみと」に関するライセンスを弘前大と協力する同商社が持つことで栽培面積・栽培本数を管理。知財を守りつつ、南アフリカでの大規模栽培における苗木販売で弘前大はロイヤルティーを得ることができる仕組みで、大学側としては「攻めの知財戦略」の一手となる。（西尾瑛）【関連記事３面】

南アフリカと日本で通年栽培

知財活用で収益増期待

「きみと」は弘前大が2016年3月に品種登録し、17年2月に「きみと」で商標登録した。

「ふじ」「東光」を親品種に持ち、果皮は黄色で果肉は白。爽やかな甘みが特徴で、蜜が多く入る。着色管理の手間が少ない黄色系のリンゴであり、味の良さに加え、蜜が褐変せず果肉に吸収される点、貯蔵性の良さ、果皮に傷が付きにくいなど、輸出に強い特長も備えている。

弘前大と協力する商社は青果物などを扱う、東京のウィズメタックフーズで、「きみと」の食味の良さに着目。甘みが強く、酸味が抑えられた味は、アジア圏で人気の高い味だという。

同社は、果樹関係の知財マネジメントを行う南アフリカのパートナー企業を通じ、現地で「きみと」の育成者権と商標権を取得。現地に穂木を輸出し、現在検疫を行っている。今後、試験栽培を経て本格栽培となり、今後10年程度で数十㌶規模まで拡大したい考え。弘前大には、南アフリカでの穂木販売収益の数％がロイヤルティーとして入ることになり、同大は収益でさらに研究を強化していく。

両者は、本格栽培、輸出までの間、日本国内における「きみと」のブランド確立も目指しており、同社は2020年から都内百貨店やスーパーなどで販売し、評判が良いという。

弘前大の林田大志助教は「（同社には）国内スーパーでの販売などスピード感を持ってやっていただきありがたい」とし、「国内での苗木の販売も伸びていると聞いており、県内でも作る人が増え、ゆくゆくは海外にも輸出してほしい。青森のリンゴが一番おいしく、一番技術がある。これをモデルケースに、きちんと品種登録しつつ、知財を守りながら活用し、収益を上げる動きにもつながれば」と話した。

上記の画像は，当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。